



知られざる

ランチェスター先生の経歴

【マル秘メルマガ】より 18 通目その 2

◆フレデリックの学生時代

1868 年 10 月 28 日、ロンドンの南部に当たるルイスハムで、建築技師の次男として生まれた。(明治元年)

父親はロンドンで仕事をしていてルイスハムに住んでいた。

1 歳位の時、父親がブライトンのホーブにあるスタンフォード・エステイトの建築技師として任命されたので、家族は南部のブライトンに引越しをした。

ホーブでは我々の一時的住いとして第 1 通りジョージ・テラスに家があった。兄の小学校教育はイースト・ブライトンにある学校でなされ、寄宿生活をしていた。

小学校時代や専門教育を受ける前までは、特別な才能を見せることもなかった。

一般的には、むしろ頭の回転が余りよくない生徒だと思われていて、スポーツも少しばかりで、得意ではなかった。普通の子供達ゲームなどで見せる、頭の良さなど全然示さなかった。

“自然はまるで自分のエネルギーを保存し続けているように思える”と兄は言っている。

しかし成長するにつれて、少しずつ確実にダイナミックな能力が現れ始め、兄という人物を作りあげていった。

単に才能ある技術者というだけでなく、多くの人達より一段と抜きんでた才能を示し始めた。

14 歳の時、サザンプトンにあるハートレイ専門学校に行き、そこで工学を学んだ(現、サザンプトン大学)。

兄のノートにあるメモによると、そこで“特別何もしなかった”が、銅メダルをもらったと書いている。

残っている事実としては、ハートレイ専門学校から、ノーマル科学学校と鉱山大学校への奨学金を得ている。(現在、鉱山大学校はロイヤル科学大学になっており、一部英国国営大学になっている)

そこで兄は、著名なグッドイブ教授や C・ヴァーノン・ボーイズ教授達に教えを受けており、その教えに対する授業料として自分の原稿を送っている。

ヴァーノン・ボーイズ氏は兄の生涯の友人の一人になった人である。

兄はグッドイブ教授に対してガス技術事業の方面へ進む決心をしたと伝えた。

兄の目立った才能はロンドンの南、ケンジントンですごした 4 年間に出て来た。

科学学校でのカリキュラムは技術者として応募するには充分ではなかった。

結果的にはこれが幸いして、フィンスベリー工科学校の夜間部に通って自分をみがくチャンスを得た。

南ケンジントンでは昼間は勤めに出、仕事を終わってから夜間部の講義に出席し、1 年間フィンスベリーでワークショップと、プラクティスにも出席した。

現在の学生の恵まれた境遇とくらべてみると比較にならない程つらいものであった。

南ケンジントンからフィンスベリーまで歩かなければいけなかったことや、昼間の仕事が終わって、夕方のクラスに出席する迄の間に食事をする暇すらなかった、ということなどは興味深いものである。

夜間の授業が終わって家に帰るときは、工業学校からロンドン橋の南側まで歩かなければならなかった。それから 4.8 Km 程馬車に乗ってそのあとまた、2 Km ほど歩いていた。

そのような困難や障害が若い日の兄の人格を作り、後年、物事を成し遂げようとする、とても強い意志を作りあげたのだと思う。

科学学校の3年目に入って兄は、5センチメートルの色消し対物レンズつき望遠鏡を作った。それは歯ざおと歯車の調節がついていて、均等間隔作りになっていた。

脚台の主なへりは正反対の軸で1つになっており、ウォームとつながっている固定した大歯車を支えていた。

さらに溝をつけた滑車とベルトがコードで連動しており、手で操作するようになっていて天体コースの動きについていく、太陽儀の仕組みになっていた。

兄いわく“勿論この様な望遠鏡は玩具に等しいものだけれど19世紀に作られて、何度もくりかえし観測が出来る、というのは面白いことじゃないか”と。

もっと面白いのは、自分が作った望遠鏡では満足出来なかったので、3年目最後の試験にわざとしくじり、それを完全なものにするのに、もう1年学校に残ることにしたのである。

(続く)

Lanchester

ランチェスター経営(株)



〒810-0012 福岡市中央区白金 1-1-8 チュリス薬院 301

TEL 092-535-3311 FAX 092-535-3200

メールアドレス customer@lanchest.co.jp HP <https://www.lanchest.com>